川辺川ダム環境アセスメントに対する疑問の数々

熊本市東区　主婦　　永尾佳代

昨年末に川辺川ダムの環境アセスメント準備書が公開されました。それに対する意見書は年末年始をはさんで１月１１日までの募集でした。この環境アセスメントに関しては、おかしな点や疑問点がいっぱいです

そもそも、この環境アセスメントの調査が始まるまでに事業の概要が明らかになっていなかったと聞いています。事業の全体像がわからないのに、アセスメントの調査ができるのでしょうか？　常識的に考えてそれは」不可能です。ですが、アセスメントの準備書面は書かれています。事業の概要がわからないのにするアセスってなんだろうと思います。

２番めに、その公開の仕方が不親切です。意見書を書こうと県庁の情報プラザにでかけてみました。資料のファイルは１０㌢の分厚さのものが６冊ありました。ページ数にして５０００頁。幅でいうと１メートルはあったでしょうか？　そこに、コピー機があるわけでもなく、もちろん持ち出しは禁止です。その内容をそこで見て理解して意見書をかけとは不親切で、大変、乱暴な話です。一体、誰がその資料を、全部そこで読んで、意見書を書ける人がいるでしょうか？　公の機関なので土日は開いていません。夕方も、５時にはしまります。一般の社会人は仕事で見ることもできない日時や時間帯です。

また、最近の資料は国交省の HP に掲載されていますが、昨年の書類はもう HP にはありません。どうやって古い資料にたどり着けばいいのでしょうか？

そんな中、説明会も５回ほど開催されましたが、開催場所は五木や八代など熊本市からは遠方でした。しかも、ほとんどが夜の開催でした。ダムができたら影響の多い下流の八代市市街地での開催も、ダムへの関心の高い熊本市での開催もありませんでした。私はなんとか、夜の説明会にいこうかと試みましたが、ちょうど年末で、高速道路も通行止めになるような悪天候の日でした。師走という言葉通り、師も走るような忙しい年末に、しかも、夜に開催するとは、国は、県民に説明する気があるのだろうかと疑ってしまいます。なんとか説明は避けたい、機会を少なくしたいと苦心しているように見受けられました。

しかも、聞いた話では、八代会場でしたか、たくさんの傍聴人が押し寄せ、たくさんの意見が出され、たくさん手が上がっているにもかかわらず、国交省は質疑を打ち切ったというのでは有りませんか？

これもまた、熊本県民に対して失礼な話です。県民が納得の行くまで疑問に答えるべきではないでしょうか？　誠心誠意位、説明責任を果たすべきです。ところが、目の前で手を上げている人々を前に質疑を打ち切りさっさと帰ってしまったとのこと。また、熊本県の環境保全課でしたか、それに対し、「説明責任を果たすように」お願いしてほしいという声を届けに行きましたが、それに対してなんら返答はありませんでした。熊本県も県民の声をきき、代弁をしようともしません。熊本県は国の出先機関なのかと不満に思いました。

以下、少し、準備書面の内容にも触れたいと思います。
私が一番、驚いたことは「川辺川ダムの影響は、集水域の３倍として渡地区までとしていること。渡以下の球磨川流域にはダムの影響はない」としたことです。
誰が考えても理解にくるしみます。水は高いところから低い所に流れます。子どもが考えても分かることです。ダムの影響が渡り以下の下流におよばないことはないです。ダムの影響で、八代湾や海までも、砂の供給や貝類の成長に、影響が出ることは、荒瀬ダムや瀬戸石ダムを見れば分かることです。このように常識はずれで、非科学的なことを国交省という国の機関が公言するとは全く信じられません。

次に、清流の象徴である川辺川の鮎と水質については
「川が濁ることもあるが、自然の降雨の際の濁りと同程度であり、放流操作などで対策を行うことで影響を回避・低減できる」とされていますが、人工の巨大な構造物が川を遮っているのに、自然の降雨と大差ないとはまったく、楽観的すぎます。国交省に撮って都合の良い解釈でしか有りません。
ちなみに、五木の上流にある穴あきダム、朴の木ダムでは、大雨の後、土砂が人の背丈より高くたまり、その後、雨のたびに川辺川の水をいつまでも濁していたことがありました。流水だからといって、環境が変わらないとか、濁りを軽減できるというようなレベルではありません。五木上流の小さなダムでさえ濁った川の水では、鮎は太ることができず、尺鮎とはほど遠い有様でした。

また、九折瀬洞の特殊な生態系については、ダム貯水や試験湛水で大きな影響を与えることを認めながらも、「試験湛水期間中のみ、入口に擁壁を設置。湛水後は撤去する。代替口を設置してコウモリや生き物の移動を促す等により、影響を回避・低減できる」とされています。まるで、団地生活をしている人間を工事中だけ一時移動するかのような書き方に、苦笑いをしてしまいました。野生の生き物たちが、そのように人間に都合のいいように避難したりするでしょうか？

また、人吉の球磨川とともにある水辺の暮らしは、「水は濁らず、魚は減らず、堆砂もしない。工事区域以外なので、人々の快適性は変わらない」とされています。
自分たちに都合のいい、解釈です。球磨川下流の荒瀬ダムができた後に、流域の人々が口々に、述べていたことを思い出します。
昔の大水は水害ではなく大水。年に数回、水が出たら家のお掃除をするような感覚で対応したとのこと。水が引いたらちょっと泥を履けばすぐに元に戻った。
しかし、ダムができてからはダム湖に溜まったヘドロ混じりの洪水が襲ってくるので、水害の跡は、掃除が大変になった、と。
また、ダム以前は、子供たちも、お小遣いかせぎに取りにいけるほどに鮎が川にうじゃう

じゃいたそうです。石を投げれば、鮎にあたり、ぷかりと浮くのでそれを素手でつかめたとか。

昔はそういう川と人々の暮らしが有りましたが、ダム以降はそういう暮らしはなくなりました。ダム以前は専業の川漁師も沢山、いたのですが、今では片手で数えられるほどしかいません。瀬戸石ダムや、一房ダムがまだ上流にあるからです。

「水は濁らず、魚は減らず、堆砂もしない。工事区域以外なので、人々の快適性は変わらない」。まるで絵空事です。

すべての項目について環境影響を楽観視・過小評価し、その保全対策も科学的な裏付けが不十分で、実行性に疑問のあるものばかりです。

この程度の内容を環境配慮としたままダム事業が進めば、川辺川・球磨川では申告で取り返しのつかない環境悪化を招くことは必至です。これでは熊本県知事が望んでいる「命と環境の両立」とは大きくかけ離れたダムになる恐れがあります。